

冴嶋友太は勇者である。

前神様

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時は神世紀297年、死のウイルスが蔓延する世界で、四国地方は神樹によって守護されていた。

そして神樹によって選ばれた3人の少女は、神樹を破壊しようとする外からやってくる異形の存在・バーテックスを撃退すべく、「勇者」として戦う。この物語の始まりは、そんな彼女等が勇者になる1年前にいた、たった1人の勇者の物語である。

目次

プロローグ	1
第1話 初陣	7
第2話 防人	13
第3話 特訓	19
第4話 新型	23
第5話 DS	29

プロローグ

俺の名前は、さえじまゆうた。 冴嶋友太。

今年度、神世紀296年神樹館に通う小学5年生だ。まずは、何故俺がこの春から神樹館へと転校する事になったのかについて話そう。

あれは、去年の12月24日の出来事だった。

「母ちゃんー！今日俺の誕生日だったよね？カレンダーに書いてあるけどケーキの予約って何時に行けばいいの？」

「今回はちよつと、お高いケーキにしたから私に取りに行くから大丈夫よ。それよりも、友太は冬休みの宿題終わってるの？」

「げげっ！忘れてたー！」

「私が帰ってくる迄に今日の分やって起きなさいよー？」

そう言っただけで母ちゃんが家を出ると同時に部屋へと戻り、残りの宿題の量を把握する。量的には、半分以上終わっているこのペースで行けば充分残りの日数で間に合う予定だ。と言っても、毎日の課題として宿題を片付けておかないと気が済まない為、早速勉強を始める。

〜1時間後〜

「まあ、このくらいでいいだろう。っと時間は…おっ！良い感じに1時間で済んだか…ん？」

勉強も終わり机に散らばった消しカスやノートを片付け始めていた所、急に家のインターホンが鳴り響いた。

「何だこのオッサン…服の上から分かるくらい筋肉がムキムキなんだが…取り敢えずここから話してみるか。…どちら様でしょうか？」

「私は、大赦から来た使者の鬼島と申します。こちらは冴嶋友太君のお宅でお間違いないでしょうか？」

「ごつい見た目の割に丁寧な言葉遣いをする鬼島さんなら別に会っても悪いことはないだろうと思ひ、返答をすることにした。

「はい、冴嶋友太。本人です、今外に出ますね」

返事をして1度インターホンを切る。玄関に向かって扉を開けるとカメラで見るとはまた違った迫力感と存在感が増している。

「今母が外出中なのですが、もう少しで帰宅すると思うので良ければ

居間にお通しします。」

「お言葉に甘えて、少しお邪魔させていただきます。親御さんと一緒に話を聞かれた方が良いかと思われそうです。」

鬼島さんを居間に案内してお茶を出す準備をする。お茶と言っても市販のペットボトルに入ってるものだが。

「粗茶ですが、どうぞ」

「おおっ！ありがとうございます。丁度喉が渴いていてね」

あつと言う間にお茶を飲み干した頃、玄関から物音がした。

「ただいまー。あれ？そちらの方は？」

「おかえりー、母ちゃん。こちらは、大赦から来られた鬼島さんだよ。どうやら、俺と母ちゃんに話があるみたいで。母ちゃんが帰ってくるの待ってたんだよ」

「あらま、そうなの！ちよつと待っててください、すぐ戻りますので」
そう言つて、すぐ様冷蔵庫に行き買い物袋から物を取り出し収納していく。

「お待たせしました、話を聞きましょうか」

「では、まず…」

木島さんが話を始めた。

「私達大赦は、長年神樹様との密接なやり取りを通じて巫女から伝えられる神託によつて、勇者の素質のある人間を選抜しておりました。数年前までは、素質のある人間を集めて、神樹様と巫女を通じてやり取りをしていましたが、年々そのお力は弱まっていく一方。よつて、神樹様から一方的に伝えられる勇者の神託は基本的に無垢な少女でないとその力を受け付けられないらしいのですが、今回冴嶋友太くんは、男の勇者の素質を持っていらっしゃるらしいのです。次の世代の勇者は未だ見つかつておらず、それまでの期間だけでもどうか、お役目を引き受けていただきたいのです」

俺自身、勇者がどうかお役目がどうかは分からないけど、もし俺に何か出来ることがあるならとこの話を受けたかったのだが隣にいた母ちゃんが話に突っ込んできた。

「その私は、あまり神樹様の事や大赦の事はあまり詳しく知らないの

ですが…お役目と言うのは具体的には一体何をするのでしょうか？」
「我々が住んでいるこのエリアのバリアを張っている神樹様に攻撃してくる外敵、通称バーテックスと呼ばれるものを追い出す若しくは駆除することです」

「つまり、侵入してくるそのバーテックス？と戦うということでしょうか？」

「平たくいえばそう言う事ですね」

溜息を吐きながら母ちゃんがこつちを見てくる。

「この子が直接関わりますから、私はこの子の意見に従います。友太、あんたはどうしたいの？」

「俺に出来ることがあるなら、俺しか出来ないことなら俺はやりたくないなって思うよ」

こういう時、俺に選択肢を与えてくる所ホント母ちゃんらしいなって思う。小さい頃から俺自信に関わる事は全て俺に答えを委ねていた。少し前に何で俺に決めさせるのか聞いたら「その方が後悔しないで済むでしょ？それに、あんたの成長のためでもあるしね」と言われた。多分母親の愛情というやつだろう。

「と言うことなので、お話の続きをお願いします」

「はい、ではまずこれから勇者として活動して頂くために——」

鬼島さんと母ちゃんによる手続きの話が始まった。学校がどうだとか言っていたけど難しい話はよく分からないかった。

〜次の日〜

「んー！昨日はケーキ美味しかったなあ！」

朝一番で、思い出したのは昨晚のケーキの味だった。

「母ちゃん朝ごはん何ー？」

1階に下りると既に母ちゃんが、目玉焼きや味噌汁と言った朝の定番料理を並べていた。

「これよ、これ。あとこれ食べたらこの服に着替えなさい」

「これって神樹館の制服だよ？何故俺に？」

「昨日話してたでしょ、今日からあんた神樹館に転校するのよ。担任の先生は、昨日来た鬼島さんが担当してくれるみたいよ」

呆れた様子で答えられたが、担任の先生が鬼島さんなのは驚きだ。何か知らないけど神樹館は、大赦が多額の援助をしているらしく、その辺は上手くやっているようだ。

「ま、とにかくいただきますー!」

勢い良く朝食に貪り着いたあと、制服に着替える。時間もいい頃合になり母ちゃんから貰ったスマホ（大赦支給）の地図を見ながら目的地につく。

「ここが、そうなのか。とりあえず職員室に行けて母ちゃん言ってたな」

校内を歩き回ること数分、職員室を見つけ中に入ると鬼島さんがいた。

「おっ! やつと来たか! もうすぐ、朝のホームルームを始めるからその時クラスメイトに紹介する形にするな」

そう言うと、鬼島さんが教室に向かって歩き始めたので慌ててついでに行く。

「——今日の休みは無しだな、それじゃあ皆に転校生を紹介するぞ。入ってくれ」

朝の連絡事項を終え、俺に教室に入ってくるように指示を出してくる。俺は教室のドアを開けて入ると、皆が注目してきたが無視して鬼島さんの横に立つ。

「はじめましてー! 他の小学校から転校してきました。冴嶋友太です。縁あって一緒に皆さんと勉強させていただきます。宜しくお願ひします!!」

軽く自己紹介を済ませると、クラスメイトから歓迎の拍手を貰った。因みに席は左端の一番後ろだった。休み時間には、転校生である俺は、毎回お馴染みの質問攻めにあつたが特に問題なく過ぎていき放課後になった。

「よし、今日はこれで終わりだ。お前ら気をつけて帰れよー? あと、冴嶋友太は残っておくように」

日直の号令とともに徐々に帰っていく生徒達。恐らくこの後の展開は、十中八九勇者の事だろうと考えていると鬼島さんが近づいてき

た。

「やつと放課後だな、今日はこれから戦うバーテックスに備えて訓練の計画を立てる。今日立てた計画を今後の訓練として続けて行き、戦いで効果が見られ次第新しい訓練なんかも取り入れていく予定だ。訓練と聞いて嫌がるかもしれないが、そこはすまない我慢して欲しい。俺としても子どもに、戦いを強要する様なやり方は良くないと考えてはいるのだが俺達大人は戦う力もない。少しでも君が生き残れるならば俺は、効果の出そうな訓練方法を試すつもりだ。よろしく頼む」
深々と俺に頭を下げてくる鬼島さん。

「こちらこそ、よろしくお願いします。武道経験は無いので少しでも戦いのいろはを学べたら今よりはマシな自分になると思います！ご指導の方改めてよろしくお願いします」

誠実な姿勢には、誠実な姿勢を。これは、父ちゃんに言われた事だ。社会には、礼儀知らずの奴もいれば良い奴もいる。前者に関しては、今の状況に不満を感じて人に当たる輩や親切にしてくれたことに関して素直に礼を言えない様な人に該当するらしい。父ちゃん、曰く「目には目を歯には歯を」精神が大事だとか。

「そう言ってくれると助かる。さて、訓練メニューに関してだが――」

結局訓練は、平日は学校終わりの1時間を使用して行う事にして、色々な武器を使う練習をするみたいだ。何でも俺の端末は特殊なので武器自体が俺のさじ加減で、形を変化させて戦うことが可能になるらしい。ただ、形状変化をさせる条件として、武器の明確な取り扱いが出来ていなかったりすると出来ないみたいだ。よって平日は武器の練習。休日は3時間ずつ身体技術向上のために、筋トレやマンツーマンで組み手をしたりするみたいだ。

「今日の所は、計画も練れたしこのくらいにして明日に備えてしっかりと寝ておくようにな。」

「分かりました、では明日からですね！」

先生と別れたあと、1人これからのことについて考えていた。外敵バーテックス…そいつがどうい奴でどうい攻撃をしてくるとか

情報がまったく無い為、戦うという実感は今ひとつ持てない。だが、やる事は決まっているので、今更不安に思っても仕方ない。それよりも今はこれから自分が死なない為に、どう努力していくかを考える事の方が最重要事項ってやつだからな。

「何にしても、これから頑張るか！」

気合いを言葉に込めながら走って家に帰った。

～次の日の放課後～

「はあー！」

木刀を型とか関係なく取り敢えず、鬼島さんに向かって斬り掛かる。当然全ての攻撃は、無力化され追撃も何度も喰らう。

「ぐっっ！」

「踏み込みがまだまだ甘い！腕の力だけでなく違う部位も上手に使って、自分の体重を武器に乗せるようにして振るんだ！次行くぞ」

「はいっ！」

その日は、剣の稽古をみっちり行われた。1時間とは思えないほどの濃い内容で大変ではあったけれど気合いで乗り切った。

「思ったよりも…しんど…いな…」

特訓が終わわり家に帰ると、すぐに寝てしまっていた。

～次の日～

「嘘だろ…もう朝かよ！くっぞー！」

文句を呟きながら、今日も学校へ行く。

第1話 初陣

あれから一月が経った。今日も今日とて、学校へと向かう。訓練のおかげで筋肉も多少ついてきたとは思いますが、相変わらず日々の筋肉痛は酷いものだ。

「イテテ：毎日筋肉痛の上での訓練だからなあ、今日は訓練終わったらアイスでも食べるかな」

学校に着くと1時間目の授業の準備をする。ここ1ヶ月過ごして変わらない事が1つある。それは、友達が転校してからただの1人もいないという事だ。何故俺に、友達が出来ないのかと思い、寝たフリをしてこっそりクラスメイト達の会話を盗み聞きしていると原因が明らかになった。

「ねえ、友太くんに話しかけてみようよ！」

「駄目だよ、だって友太くんは大事なお役目を大赦から頼まれて転校してきたんだよ？僕らが話しかけたりしたら、邪魔になっちゃうよ」
「それもそうだねー」

という事だった。正直、未だ戦いをしていない為にお役目についているという実感はない。それにしてもお役目についているというだけでこんな扱いになっちゃうのか。

「!？」

その瞬間何処からか鈴の音が響きだした。

「えっ！何で皆止まって…！うわっ！」

すると視界が変わり、やがて巨大な樹が見える場所へと変わった。

「もしかして、あれが神樹様？って事は…ここがそうなのか…」

鬼島さんから、予め聞いた説明とこの場所が酷似していたため、直ぐに理解することが出来た。

「取り敢えず変身するか、スマホは…っつと」

俺は、勇者システムを立ち上げて返信ボタンを押す。すると白い花びらが舞い上がり俺の体を包む。

「おおっ!？」

花びらが包んだ箇所から銀白色の勇者服が装着される。

「んー、センスは悪くないんだけど白って事は汚れたら目立つよなあ…この勇者服洗えるんだろうか？」

まったく戦闘に関係ないような事を考えていると遠くには見たことのない生物？がいた。恐らくバーテックスだろう。(星屑)

「鬼島さんから、聞いてはいたけど実際見ると気持ち悪いな…」

俺は一先ず弓で、バーテックスに向けて攻撃してみる。1ヶ月前までは、下手くそ過ぎて的を大きく外していたが今では殆ど当てること出来る。そのせいか、初戦闘にもかかわらず全弾命中している。

「ま、今の所は弓と剣しかまともに扱えないけどな」

遠距離武器と近距離武器を今の俺は扱うことが出来る。前もって鬼島さんが、神託によってあまり日数が無かったということを知っていたため内容を変えてある程度剣と弓を先に扱えるように考えて組んでくれていたらしい。

「にしても、後どれくらい倒せばいいんだ？さっきから打ち続けているけどパツと見100体以上いるぞ、あれ」

既に相当数倒していると思うのだが、意外とバーテックスの数が多く少し焦っている。

「ここで打つても仕方ないし近距離戦でやってみるか」

この数の多さだと大抵群れの統率者がいるはずだ。そいつを倒せば恐らくバーテックスの行動も鈍くなって一気に殲滅しやすくなるはずだ。

「うおおおおお!!はっ！せいー！」

一撃で確実に屠れるように剣を振りながら、一体一体倒して行く。勿論バーテックスも追撃してくる為容易ではない。

「ぐっ！痛てえなあ!!はあ！」

右脇腹を噛み付かれたが慌てること無く剣を逆手に握り突き刺す。そして今一度距離を取り体制を整える。

「ちよつと、出血が気になる所ではあるけど…何とかなるはずだ…しかし、見つからねえな」

近距離戦闘に変えれば、攻撃してくるものとばかり思っていたが見つからない。恐らくは、もう少し後ろにいるのではないだろうか？司

令官が指示を出す場合本隊の後ろにいろことが多いと戦闘資料で読んだ記憶がある。

「つて事は…突っ込むしかねえんじゃねえか！その前に本隊に殺されそうな勢いなんだが…。でも、やらないと始まらねえし…」

優柔不断になりながらも気合いで突っ込むことを決意した俺は、弓を先に使って前方を殲滅した後うまい事剣を投げて倒していく。

「はあーぐっ…おらああ!!」

半分程、決死の思いで殲滅した所でイレギュラーなことが起きた。バーテックスが自爆攻撃を行ってきたのだ。爆散させる前に攻撃を行うが爆風で吹き飛ぶ。無傷というわけにはいかず、当然ダメージを受ける。

「ぐっ！だがなあ！逆にチャンスなんだよ！」

弓を拡散させて撃つことで爆発寸前のヤツらを誘爆させた。そのおかげで、大多数のバーテックスを吹き飛ばすことに成功する。数が減り後ろに居るはずの司令官が出しゃばってくる。

「やつと…お出ましか、大きき的には丁度2倍くらい　か？」

出てきた途端に攻撃をしてくるが躲して、剣でぶっ刺してみても効果は薄いみたいだった。それならばと近くにいた生き残りの自爆攻撃の奴を誘爆させると呆気なく倒すことが出来た。司令官が倒された事によりバーテックスは、統率が取れなくなり殲滅する事が出来た。

「鎮火の議が始まった…」

またも、視界が変動して元に戻る。噛まれた箇所や切り傷から出血が見える。

「思ったよりも痛てえな…確か鬼島さんが怪我したら保健室に行けって言つてたっけな…母ちゃんに心配かけたくねえし行くか。てか今何時だ？」

時間を見るためスマホを見ると14時を回っていた。

「最後の授業は、間に合いそうにないか…」

傷だらけの体を庇いながら保健室へと向かうと道中に鬼島さんがいた。

「お疲れさん…その怪我…」

俺を労わるように見つめてくる鬼島さん。

「ははっ、まあ…ちよつとやらかしまして…。これだけで済んだならマシな方でしょ？いやあ、恥ずかしながら手強かったですよ…！バーテックスの中でも弱いと言われる星屑にこのザマとは…」

「とにかく保健室へ向かってくれ、授業に関してはコチラで対処するから」

「ありがとうございます、では」

鬼島さんと別れて、保健室へと向かう。着いた途端に治療が始まり滅茶苦茶にされた。(医療的な意味で) 正直傷口に消毒液掛けられた時は死ぬかと思った。いや、マジで！

〜鬼島目線〜

ホームルーム前にいつも通り準備を始めていると、大赦からメールが来た。内容は、勇者である冴嶋友太がバーテックスとの戦闘に入ったという事だった。神託によって時期的に考えてそろそろだとは思っていたが。

(唐突すぎる…これが普通なのか…。)

疑問に思いながらも無事に役目を終わってくれることを祈りながら、色々と準備を行う。学校側に授業の公欠届けの提出及び雑務、保健室に手当ての準備等やれる事をできるだけ済ませておく。すると、14時30分を回る頃冴嶋友太は戻ってきた、全身に傷を負って…。

「お疲れさん…その怪我…」

彼を見た瞬間俺は、自分が恥ずかしくなった。大人である自分は、本来なら彼を…子どもを守らなければいけない立場なのに、彼と共に戦うことも同じ苦しみを背負うことも出来ないのだ。情けない、大人として一人の人間として彼にしてあげられることがあまりにも少なすぎる。

「ははっ、まあ…ちよつとやらかしまして…。これだけで済んだならマシな方でしょ？いやあ、恥ずかしながら手強かったですよ…！バーテックスの中でも弱いと言われる星屑にこのザマとは…」

「とにかく保健室へ向かってくれ、授業に関してはコチラで対処する

から」

彼の背中を見送り俺は壁に拳をぶつけた。

「あの怪我は、俺の訓練内容に抜かりがあったからだ！もっと効率良く出来たはずだ、俺に出来ることは精々…訓練内容を考察することだけだ！すまない…」

く 冴嶋友太く

「痛てえけど、マシになったか…。そう言えばさつきメールで鬼島さんから今日は訓練休みだって言われてた…。放課後は…近くのショッピングモールでも行くか」

保健室から出て、教室へと戻る。途中、数名の先生方や生徒に怪我のことを聞かれたが、お役目でこうなったとだけ伝えて通り過ぎた。「にしても…ちよつと今回はヤバかったな。敵の誘爆がなければ今頃…。やっぱりもうちよつと手数増やさないとだめか？」

教室に戻った俺は、ノートに今回のバーテックスとの戦闘による反省点を書いていく。手数が少ないこと、圧倒的に勇者服での戦闘経験の少なさが目に見えてわかったこと等。

「俺の長所を生かすには、多種多様な武器の扱い方に慣れるしかない。ある程度使えるレベルになった後は、武器を切り替えて使ってみて最終的に自分に合う武器を使っていくか…。訓練内容については、鬼島さんと相談か」

帰り支度をした後、訓練内容について鬼島さんにメールを送り教室を出る。傷口はまだ痛いけど、今日は授業が潰れたので俺的にはラッキーだった。

「まずは、本屋で武器の資料集めをして大赦に欲しい装備を作ってもらうかあ。この前確認した時もOK出たし」

鬼島さんに、良かったら武器とか作ってもらえないかと聞いたところOKが出た。武器の威力はバーテックス侵攻前の物だから期待はしないでくれと言われたが、俺が自ら使用してコピーした代物だと多分強くなると思う。神樹様の加護を受けている俺が手にする武器は基本的に人の域を超える代物になっているらしいからな。

「相変わらずの盛況っぷりですなあ、何階だろ…」

この町で1つしかないショッピングモールなので、当然人も多い。最近では、店内のフードコートでジェラート屋さんが出来てより一層人気を誇っているこのショッピングモール。そんな中久しぶりに来た俺はエレベーター横のマップを見ていた。

「何か困り事ですか？」

「うおっ！」

急に神樹館の制服を着た女の子に横から話しかけられた俺はビツクリして変な声を上げてしまった。

「あく、驚かせてすいません。何か困ってそうでしたので…」

「…実は久しぶりにここに来たんだけど、本屋さんの場所が分かんなくてさ」

「私知ってますから、良かったら案内しましょうか？」

女の子は、そう言うお手招きしながら案内してくれる。

あっという間に本屋さんの前に着く。

「本当にありがとう…俺は冴嶋友太。神樹館の6年生だ、良かったら今度何かお礼をさせて欲しいな」

「お礼なんて別に…私は三ノ輪銀です。神樹館小学校で5年生やっけます…それでは、私はこれで…」

「うん、また会おう」

案内をしてくれた女生徒にお礼を言って、武器となる資料を探してみる。だが、参考になりそうな物はあまり無く帰ってからインターネットで調べた。

第2話 防人

買い物をした次の日の朝、日差しが眩しくて起きる。1階に降りるといつもなら母ちゃんが挨拶してくるのだが今日はいなかった。

「母ちゃん？書き置きか…」

リビングの机に置いてあった書き置きには、『今日の朝は特売につき、買い物に言って参ります』と書いてあった。

「ホント特売好きだよなあ母ちゃん、取り敢えず温めるか…」

書き置きの横に置いてあった朝食を手に取りレンジで温める。レンジで温めを待っている間に学校の支度を整え温め終わりのタイミングで朝食を手に取る。

「いつも通りの味だな。げっ！今日の運勢は8位かよ！いいのか悪いのかよくわからんぞ…」

食べる途中でテレビをつけると、丁度星座占いをやっていた。俺のかに座は8位だったが、最近俺は占いを信じないことにした。元々占いは、好きだったのでよく見ていたのだが小学6年生になってからは、気持ちの変化も起き始めて結局の所気持ちの持ちようじゃね？と思っただのだ。

「ご馳走様でしたー！茶碗つけて…つと行ってきまーす」

朝ご飯を食べ終わり茶碗を水につけた後時間も押していたため、俺は家の戸締りをして走って学校へと向かった。

「そう言えば、昨日の傷跡どうなってるんだろう…おおっ！だいぶ治ってる！」

神樹様のお陰なのかどうかは、分からないが昨日の戦闘で傷付いた体の殆どが治っていた。今日の戦闘訓練では、鬼島さんに頼んで置いた物と訓練用的なんかも用意してくれているらしい。

「気合いだろー！」

〜数時間後〜

「やべっ！爆睡してた！」

時計を見ると既に放課後だった。疲れも出てきているのか、最近の授業ではよく気絶していることが多い。気合いが足りてない証拠だ

！もつと頑張らないと。

「鬼島さん！」

「お！やつと来たか…コレが頼まれていたものだ。それとココから移動して射撃場に向かうぞ」

「ありがとうございますー」

学校から移動すること10分。目的地に着くと、俺は早速、銃を持ったまま勇者服に変身する。武器を持って変身することにより、神樹様がその力を使って勝手に改造してくれるからだ。本来であれば筋力のあまりついていないこの体だと実銃を1発打っただけでも反動が凄くて、動けなくなるらしいのだが、勇者服状態の俺であれば大丈夫みたいだ。

「スムーズに行くな…こつちが近距離から中距離向けの銃。で、こつちが遠距離武器か。弓よりこつちの方が使いやすいような気はするが場合によるな…」

試し打ちを繰り返しながら、手数を確実に増やしていき、命中率をあげる為にも多く打っていく。

「勇者服状態で持ったものなら…いいのか。なら、鏡を」

俺が持った鏡を、的に鬼島さんに銃を打ってもらったのだが鏡は実銃では割れなかった…。

「強化ガラスか？俺が打ったらどうなるんだ？パンツ！あ…割れた…」

鏡は見事に砕け散り辺りに突き刺さった。

「これは、あれだな範囲攻撃に使えるな」

小細工満載の戦闘スタイルを確実に築きつつあった俺は、最終的に初期状態は腰に二つの銃を付け（近距離から中距離向け）背中に遠距離武器を背負った状態にした。

「本当は1つに絞った方がいいんだろうが、俺はこの方が戦いやすいしな…」

「今日はもう終わるか？」

「はい、今日は頭を使ったので疲れましたし、この辺にしておきます」
鬼島さんに学校まで送ってもらったあと、家に帰ると母ちゃんが

酔っていた。

「おおくおかえりく」

「うわあ、お酒臭っ！コイツは飲んできおったなあ！」

「うへへくZ z z …」

「って寝んのかよ!!臭いけど我慢して布団連れて行くか」

寝ている母ちゃんを布団まで引きづって行き寝かしつける。19時に寝ている母ちゃんは新鮮で、少し笑ってしまう。

「母ちゃんいつもありがとな、俺不器用だけど勇者のお役目頑張るよ」
寝ている母ちゃんにそんな事を呟いた後、冷蔵庫から魚肉ソーセージを取り出し今日の晩御飯にした。お腹空いた時は取り敢えずコレ。
「…うめえ、自主練でもするか」

日課である、素振りをした後お風呂に入り今日は大人しく寝た。疲労がピークに達していたのかこの日は爆睡した。

く次の日の昼く

この日は、バーテックス（星屑）が昼頃に攻めてきた。俺は変身して樹海へと入ると敵の位置を高いところから見渡す。

「あれか…、前より多いな…」

遠くの的を狙いを定めて打ち尽くす。ここで登場必殺鏡。鏡をバーテックスの頭上に投げたあと一気に撃ち落としていく。弾丸が勢いよく鏡を割っていくお陰でバーテックスに破片が突き刺さっていく。

「マジ強いわ、このコンボ。敵残存兵力の5割は削ったぞ?…つと今回は司令官2体か」

冷静に敵陣の数を観察しつつ司令官を探していた所、呆気なく見つけることが出来た。本能的にあの2体はなんかやばそうな雰囲気を感じていた。

「これも、勇者だからなのかは知らんけど！」

取り敢えず攻撃を試みると、何故か攻撃がかき消されて何かが向かってきた。あの2体の部位みたいだが…。

「…!!嘘だろっ、ホーミング式のレーザービームか!くっつ！」

部位到達前に攻撃してみたものの全てかき消された。無論不意を

突いた攻撃もホーミング式のため全てかき消された。

反撃と言わんばかりに攻撃してきた。ギリギリのところまで武装を切り替えて全て打ち落とししたが、2体を見返した所破壊した部位が治っていた。

「こういう時こそ、こいつの定番…」

俺は、円形の爆薬を作り出し勢いよく司令官のヤツらにぶつけまくる。勿論火種が無ければ爆発はしないが、狙いは上々。

「ここからが本番だぜ、バーテックス!!」

俺は弓矢の先端部分を変形させる。狙いは必中。この一撃で確実に落とす。

「食らえー!」

俺は弓をバーテックスの額目がけて放つ。到着する前に先端部分には起爆するように小細工をしていた為、辺りに撒いてあった爆薬が誘爆して大爆発を起こす。

「敵影なし…か。この方法効果的だな」

やがて、鎮火の議が始まり元の世界に戻る。順調に手数も増えて戦いにも優位性を保ってきてはいるが、これからもそうとは限らないらしい。

皮肉な事に俺が勇者についてからは、日数が重なる事に敵がより強くなつて来ていていいるとか。その原因は新たにアップデートした勇者システムのせいだと聞いたが詳しくはよく聞かされていない。

また、今回の戦闘では、かなりの実戦データが取れたらしく1度端末を借りたと言われた為鬼島さんに渡した。現時点で勇者適正のある少女を集めて「勇者」とは別に、新たに「防人」と呼ばれる組織を作るらしい。何でも壁の外の調査がメインだとか。

「端末が帰ってくるまでは、肉体を鍛えることに専念するか…。とは言え今日はもう疲れたし帰って休もう」

帰りは、鬼島さんが車で家まで送ってくれた。

「ただいまー」

「おかえりー。ご飯出来てんぞ〜!昨日はサボったから今日はハンバーグにしてみました!」

「うおおお!!流石母ちゃん分かってるう!!」

家に帰ると母ちゃんが、俺の大好物であるハンバーグを作ってくれていた。ちなみに味はファミレスレベルだった(普通に美味しい)

次の日は、きちんと朝から登校した。(遅刻していないとは言っていない)

「冴嶋くん!」

「うおっ!びっくりした!」

「今日この後時間あるかな?」

「ん?放課後のことか?それなら、全然時間あるけど…」

「放課後教室に残っててね!話があるから!」

俺は唐突に話しかけられた女子に放課後に教室で待機する様に命令されてしまった。名前も思い出せないが、彼女が隣の席であった事は知っている。とは言え、一言も話をしたことは無いわけで…。

「これは…あれか?告白っつー、いやいやいや!勘違いはいかんよ! うん!俺勇者だし、そう言うのはちよつと…」

何か壮大な勘違いをしている気がしたが、この時はまだ放課後に言われる事がまさかあんな事だとは思いつかなかった。

〜放課後〜

「んで俺に、用事って何かな?」

「その前に自己紹介するね?私は、木崎きさき 茉莉まり」

「俺は…って言わなくてもわかるか、自己紹介してたし。それで早速で悪いんだけど…」

そうだねと言うと木崎は、スマホを取り出した。

「どうしたんだ?スマホ出して」

「きつと、説明するよりなった方が早いから!」

スマホを操作し出すといきなり、木崎の姿が変わった。

「もしかして…お前勇者なのか?」

「ううん、少し違うよ私は防人。防人の役目は主に壁の外に行き調査をする事、また現勇者である冴嶋友太に協力する事」

驚いた。まさか、木崎が防人だったとは…。

「その…何だ？正直驚いた。でも、俺に協力ってどういう事だ？勇者は、勇者の役目がある様に防人にも防人の仕事があるんじゃないのか？」

「普通ならそうなんだけど、私の場合君の家とか席とかついでに言うと、クラスとか相当近い距離にいるじゃない？接触しやすいし、大赦側としては勇者一人に任せるのは些か荷が重いのではとの判断で私を協力者に任命したみたい。言わば君の補佐ってところだろうね、私が出来るのは勇者ほどの力は持ってないから、援護くらいしか出来ないけどね、よつと」

話し終わると変身を解いた木崎。

「今日は、話をするだけだから取り敢えずこれで解散しよっか。私もこれから訓練あるし」

そう言うと、彼女は走ってどこかへ向かった。

「…騒がしいやつだな。俺も訓練行くか」

最初の印象は、変わり者だなと思った。防人になって間もないにも関わらず、戦いに関して積極的だし何より話す時の距離が妙に近い。心臓に悪いからやめて欲しいんだが、ありや言っても聞かねえタイプだな。

「明日からが大変だわ…」

第3話 特訓

あれから、一ヶ月が経ち端末がようやく帰ってきた。解析に時間かかりすぎでは？とも思ったが、気にしない事にした。

「久しぶりに変身してみるか」

勇者システムを起動すると前とあまり変わりが無いかと思いきや俺の両手に剣が握られていた。

「話には聞いていたけど、これが専用武器か？…ふんっ！はあ！…にしても二刀流にしては、リーチが些か短い気がするが振りやすさを考えてのことか？」

特に剣を振るうことで違和感を感じることは無く、寧ろ怖いくらいによく馴染んでいる。専属武器というのはこうも扱いやすさに長けているんだな。

「あーもしもし？木崎さん？いきなりで悪いんだけど、これからちよつと模擬戦しませんか？」

『「いいよー！じゃあいつものとこねー！」』

この1ヶ月間で、木崎さんとは随分と仲良くなれた。彼女の訓練しているところも何度か見学させてもらったのだが普通に凄かった。身体能力は一般人よりもずば抜けて、人間離れしているし何より技術が凄かった。本人曰く、

『私は、今出来ることを最大限活かせるように磨いただけ、元から素質のある才能はもつと努力して才能が無いものは凡人レベルには出来るようにしているだけよ？』

と謙遜しているが、俺から見れば何事においても彼女は天才であると思えるばかりだった。

今俺が向かっているのは、いつも2人で模擬戦をするために使っている海岸だ。

「おっ！来たきたー！」

「ごめん、お待たせー！」

お互いに今回のアップデートでの情報交換を行う。1週間ほど前から決めたことで、お互いに知り得た情報で有力な物であれば何でも

共有しようってことで始めたのがこの情報交換。会う度にまず、これから始めた後本題に入る事がほとんどだ。

「んで、どうだった？今回のアップデートは」

「そうねえ、あなたが使っていた銃をベースに試作品として幾つか武器が付属されたわ。勿論星屑を一撃で倒せるレベルではまだ無いんだけどね」

情報によれば、勇者と違いスマホにメニュー画面があるらしくタップする事で武器の出し入れが可能だそうだ。

「なるほどなあ、俺のは主に勇者服の防御力強化と追加装備の専属武器が着いたことだ。これは実際に見た方が早い。よっ…」

変身してみるとやはり両手にはその武器がしっかりと握られていた。

「ふうん、それがさつき言ってたやつか。取り敢えず試してみる？」

「おう、よろしく頼む」

そして、俺達は互いに十分な距離をとって各々武器を握る。俺は専属武器を、木崎さんは銃を。

「それじゃあ、開始！先手必勝！」

俺は素早く盾を出して防ぐ、が彼女も何の策もなくただ弾を打ってきたのではなく…

「くっ…。なっ！」

弾幕を張られながら、何と手榴弾を投げってきたのだ。咄嗟のことで防御が追いつかずそのまま後方に吹き飛ばされる。

すかさず、間合いを詰めて近接戦闘へと切り替える木崎さんを横目に専属武器の機能の一つである「伸縮」を発動する。地面に着地するまでの反動を剣の伸縮によって殺し、もう片方の剣を木崎さんへと向けて投げる。

「おっと…、流石ね友太君。だけどまだまだよ！」

ギリギリの所で攻撃を受け流されると同時に後方へと、体制を整える木崎さん。もう一度銃の乱射が始まり、またも防御に回る。コレがおよそ2時間ほど続き訓練が終わる。

「あー…、疲れたあああ！」

「友太君はあれね、体力もつと付けた方がいいわ。火力や戦闘スタイルは強力なのだから、持続性を持たせる為にも日々のトレーニングメニューにランニングも追加した方がいいわね。何だったら朝一緒に走る?」

「追加!?てか寧ろ、何でそんな元気なのか教えてくれよ…。あれだけドンパチ戦ったじゃん?攻防激しかったじゃん!」

済ました様子で話しかけてくる彼女は、何処か楽しそうだった。ただ、疑問に思ったのは息切れ1つしていない木崎さんの秘密を知りたかったってことくらいだ。

「それで、専属武器の性能は把握出来たの?」

「急だな!?出来たよ、だいたい使い方は分かった…っ!」

「どうしたのって…その痣!」

この専属武器を使っていて分かったことがある。この武器の本来の力を使うと、どうやら痣みたいなのが出来るみたいだ。この痣は、俺の武器に触れている部分…手先から侵食しているみたいで具体的に言うのであれば、武器を使用し侵食されている最中は、痛みが生じるのだが使わなければ痛みは消える。厄介なのは侵食された部分が変色してしまっているという点だ。見つかると厄介な事(母ちゃんに怒られる)にもなる。

「ああ…なんて言うかどつかぶつけたかな?ははっ」

「もう、気をつけてね」

(馬鹿正直に武器使ったら痛みが生じるとか、話したら責任感じちまうだろうし黙っておこう…)

木崎さんの呆れ顔を横目に変身を解く。

(この痣のこと…後で鬼島さんに聞いてみるか)

木崎さんと別れた後、待ち合わせ場所である喫茶店へと出向くと既に鬼島さんが座っていた。

「それで俺に相談だったよな?」

「はい、実は…」

俺はまず手先の痣を見せた。この時点で既に手の甲の半分程は日焼けした程度に黒く染っていた。この痣が出来た経由と専属武器で

ある2本の剣を扱うと痛みが生じると言ったことを話した。終始真面目に聞いてくれる鬼島さんだったが痛みを生じると言ったことを話した途端少し様子が変わった気がした。

「纏めるとアップグレードした勇者システムの：友太君専用武器を使うと痛みが生じ瘡が広がるか?」

「そうです：ですが前の機能のものを使った場合は何もなかったです」

そう、今の俺の勇者としての能力は2つあって1つは前にあったバーテックスに通用する武器の複製・行使。2つ目は今回新たに導入された専属武器である「双剣」だ。

「了解した、その事については俺の方から調べておく。それと、もう1つこれからの戦闘時アップグレード前の力だけでどうにか出来るのであればできるだけその力だけで戦って欲しい。アップグレード後の力が如何様なものにして、使うと痛みが走るなんて危険極まりない」

「分かりました、先生この事は木崎さんには内密にお願いします。五月蠅そうだし」

「ははっ！本音出てるぞ、だが仲良くなっているようで安心したぞ」

「最近は怒られてばかりな気が：てかしばかれ過ぎてキツイです」

「それも愛だな」と言いながらさらっと会計も済ませていたので、大人ってスゲエななって思った。

「良かったんですか?奢ってもらっちゃって」

「いやいや、これくらいは出すぎ。後輩に出させるとか普通ないだろ?」

(ゴチになります!)

心の中でそう呟いて鬼島さんと別れた。

第4話 新型

「…くん、友太君。起きないとキスしちゃうぞ！」

「うえわあああ！危ねえ！こんな形で初チューを取られるのは嫌だ！」

危機一髪。朝腹部辺りに重みを感じた為、薄目で前方を見やると何故か木崎がいた。咄嗟に顔を逸らした為避けることが出来たが油断出来ねえ。

「あらら…結構ウブな反応するのね」

「お前がマセ過ぎなんだよ！」

ニヤニヤしながら見てくる木崎に対して、一言言葉を返した後部屋を出て顔を洗いに1階に下りる。

「朝から何やってんだアイツは…」

ここ数日間はアイツとマンツーマンで訓練(専属武器は使用してない)していたせいか、よく絡んでくるのだ。苦手では無いが、内心冷や冷やする。アイツは自分の可愛さを自覚しているのかどうか分からないが、勘違いさせる行動を良くするため平常心で居られる俺はもはや仏か神レベルでは無かろうか。

「母ちゃん、何で木崎家に上げたの？」

「あらあ、だってアンタの初めての彼女でしょ？私は応援するわよね？茉莉ちゃん」

「そうです、寧ろ拒絶する意味がありませんよね？」

「誰が彼女だ、誰が」

顔を近づけきた木崎の顔を右手で押さえつけながら払う。

「きゃっ♡もう！乱暴なんだから♡」

「キャラぶれてんぞ、最初お前クールキャラだったろ？」

「イチヤついてないで早く食べなさいよー」

「んじや、いつてきまーす」

家を出ると腕に絡みついてくる木崎。因みに俺の手は現在、包帯を使つて上手く痣を隠しているため母ちゃんにはバレていない。流石

に「怪我したの？」とは聞かれたが

「厨二な病に掛かったんだ」

と言ったら「そういうお年頃なのね」とあっさり返された。バレなかつた代わりに大事な何かは犠牲にしたと思う。

「木崎、最近よく絡んでくるけどどうした？ストレスでも溜まってる？」

『茉莉』って呼んでって言ったでしょ？」

「ま、茉莉さん」

時たま見せるあの顔はマジで恐怖だ。

「よろしいっとこれは…」

「この感じは随分と時間が空いた気がするが…」

俺は勇者システムを立ち上げて変身する。同様に木崎も姿が変わっていた。周りを見渡すと樹海が広がっていた。端末を見ると敵の位置が表示されていた。

「おお…今回も随分と…。ん？あの馬鹿でかいのはなんだ？」

いつも通りの星屑の大軍ともうひとつの反応は、倍くらいに大きく群れのボス的な何か威圧感を放っていた。

「知ってると思うけど勇者システムのアップデートによって、バートックスの形態とか能力とか変わったのだと思うわ。今までのバートックスよりも強力だと言うことは間違いないわね…」

「何にせよ、戦ってみるしかないってことだろ？」

「それは、そうでしょうけど…って！もう行ってるし！」

俺は、茉莉の言葉を待たずに先に邪魔な星屑を倒すために距離を詰める。勿論、専属武器は使わずに旧式の装備だけだ。

「くっ…！思った以上にキツイな！っ！」

不意をつかれて背後から星屑が迫ってきていたが茉莉が撃ち落としてくれた。

「無茶するわね…でどんな感じかしら？」

「一先ず、星屑は変わりないみたいだ」

感触的には今までと同じだが、前よりも動きに統率が見れている。具体的には誘い込みからの制圧攻撃、不意をついた攻撃等だ。だが恐

らくこいつらは支持されているだけに過ぎない。本命は恐らく…。

「戦いながら聞いて欲しいのだけれど何故専属武器を使わないの？」

不意に茉莉から通話機能を通じて話を振られる。

「1つは、敵戦力の把握。旧式でどの程度やれるのか知りたかったっていうだけだ。2つ目は…っと。使用時間に制限があるからだ」

勿論、制限時間があると言うのは嘘だ。だが、この言い訳ならば何の疑いもなく信じるだろう。俺だけが使える専用武器という事はつまり、俺にしかこの武器の性能などを知るすべがないからだ。最も大赦側のお偉いさん方は知っているだろうが。

「ふーん、とにかく友太君。時間制限があるなら使い所は見極めなきゃダメよ」

「分かってますよーっと」

引き続き俺と茉莉のバーテックスとの激しい攻防が繰り広げられる。茉莉は、防人とは言え以上に強い。普段見せる性格の悪さ…もとい、素行の悪さとは違い、戦いにおいては常に冷静かつ有効手段を自分ができる範囲で行っている。この前、鬼島さんに何であんなに強いのかと聞いた所

「アイツは、普段ふざけているが実は凄く努力家なんだ。戦闘訓練も率先して行っているし、何より向上心が人一倍強い。特に君のサポート任務に誰を付かせるかについて防人内で話し合っていた所自ら立候補したんだ。ただ当然実力も君と劣らないくらいには必要でな…3ヶ月程の訓練が終わった頃には今のレベルには達していたと思う」

あの時はよく分からなかったが今ならわかる気がする。

茉莉の動きに無駄はなく、かつ俺との力量差を感じさせない佇まい。正直一緒に戦ってくれて頼もしいと思えた。

(にしても…星屑の方は片付いたが問題はあの新型だ。)

事実、新型については全く情報はない上に攻撃もしてこないのだ。俺は手を打つために一言茉莉に伝える。

「少しここを任せてもいいか？少しあの新型について調べてきたい」「分かったわ、任せて！」

群れの集合体に向けて一点集中して、銃を構えてうち放つ。流石の

跳躍力で切り抜けると一気に新型バーテックスへと近づくと口みたいな部分が開き、突如“光る矢”みたいなものが無数に飛んできた。「おいおい！これは凌ぐしかないだろうっ！」

俺は咄嗟に盾を出し打ち続ける矢を受けるが、余りの矢の多さによつて盾が耐えきれずに貫通する。

「ぐっ…!!」

(痛い痛い!!死ぬほど痛い!!てか貫通してるけどこれちゃんと塞がるよね?)

心の中でそう叫びながらも気持ち切り替えつつ、状況確認を行う。

(あのバーテックスの攻撃手段の1つとして口から吐く光の矢は注意点だな…。貫通したお返しとして咄嗟に弓で攻撃してみたが、回復しているみたいだ。最悪だなこれは。自己再生能力付きとは)

「出血も気になる所ではあるが…専属武器を使う他ないか、やむを得ない。」

俺は新型勇者システムの方に切り替えると双剣を構える。

「お前をここで倒さなければ、皆が危険に晒される事になる。そんな事許せるはずが無い、悪いがココで倒されてもらおうか」

俺は、再びバーテックスへと近づくがまたも光の矢を放たれる。しかし、俺は光の矢を剣で弾き近づく。

「甘いんだよ！オラアアア!!」

バーテックスの口の中に手榴弾を投げ込むと爆発して吹き飛ぶ。但し、またもや自己回復が発動する。

「だが、これで攻撃手段はなくなった！これで終わりだ」

無数の弾丸をバーテックスに向かって打ち込むとやがて、動かなくなり鎮火の義が始まる。

「くっ！」

何とか倒せたが、またも痣が広がり始め痛みが走るがやがて納まった。今はどちらかと言うと腹の風穴の方が痛い。

「無事…ではないみたいね」

「ぼちぼちだ…星屑任せて悪かったな、そつちはどうだ？」

「見ての通りよ」

見る限りだとかすり傷が数箇所、痣が数箇所見える。

「取り敢えず鬼島さん呼ぶか…」

数分後、鬼島さんが到着した後すぐに病院へと向かった。俺は右腹部が貫通していた為大事を取って4日程寝たきりだった。

「友太…その痣の正体は□□□□□□によるものだ、お前が双剣…いや専属武器か。それを巧みに使えば使う程それは病の如くお前を蝕み、やがてはお前自身が人間という概念から外されてしまうものだ」「そうですか…。つまりどういうことですか？」

「分かってないんかい！ツツコミ入れてしまったじゃねえか！まあ、つまりはお前自身が□□□□□□になるってことだ」

俺自身、何となくそうなんじゃねえかとは薄々思っていたがまさか本当にそうだとは思わなかった。

「仮にそうだったとしても俺は俺ですよ、まあ記憶が消えたりしたら流石に分かりませんが…」

「怖くないのか？」

「そりゃあ、怖いですけど。でも、俺が戦わないと世界が減ぶじやないですか？それにこの武器を使わないで済むくらいには強くなれば問題無いですしね」

「全く…はあ、分かった兎に角伝えたからな」

それだけ言うと鬼島さんが出ていく。俺は腕の痣へと見やると、特に利き腕の右腕は思ったよりも侵食が激しかったみたいで完全に色が違っていた。

「思ったよりもこれは…」

「友太君…」

声を掛けられて咄嗟に扉の方を見ると茉莉が立っていた。表情は若干暗く何か言いたそうにコチラを見ていた。

「わざわざ見舞いに来てくれるとは思わなかったよ」

「ええ、でも今日で退院だって聞いて…」

茉莉は心あらずと言った様子で話をしていたが、俺は何となく聞いてみたくなった。

「それで…何が聞きたい？何か俺に聞きたいことがあるんだろう？」

「まず…その前に謝らなければいけない事があるわ、ごめんなさい。私貴女の様態についてある程度知っているの…」

先程からやけに、よそよそしいとは思っていたがそういう事か。

「そうか…言っておくけど止めても無駄だぜ？これが俺が唯一出来ることだからな」

「…それでも私は、貴方に傷ついて欲しくないわ。どうしてそこまで体を張れるの？」

「強いて言うなら未来へと繋ぐためだ。少なくとも俺は遠くない未来…このままのペースで、敵が攻めてきた場合限界が来るだろう。そうなった時、俺の次に勇者になった誰かがこの絶望的な世界を変えてくれるような、そんな未来が見えるんだ。だからこそ、俺はこんな所で立ち止まっている訳には行かないんだ」

「呆れたわ…仕方ないわね私も一緒に戦うから頑張りなさいよ！」

それだけ言うと茉莉は、病室から出ていった。

「やれやれ…ありがとな茉莉」

いなくなつた病室で1人ポツリと呟いた。

第5話 ドS

翌日、俺は無事に病院から退院した後家に帰っていた。退院時、茉莉は来なかった。

「脱病院飯！そう言えば…あの武器の名前決めてなかったっけか？」
今まで専属武器の双剣としか呼んでこなかったけれど今更ながら言い難いと思っただため、名前をつけることにした。

「エクスカリバー？いや、違うな…魔剣ファフニール？魔剣じゃねえしな…」

散々迷った末、最終的にはネット検索で調べたニゲラと言う花の名前をつけた。

前回の戦いでは、旧式の装備で戦う場合バーテックスの中でも比較的に弱い星屑にしか攻撃が通用しないことがわかった。これからの特訓では、それを踏まえた上での独自の戦闘スタイルを築く必要がある。

「何はともあれ、今日は休みだから遊び」何か言ったかしら？「ぞー…。って何でいんだよ、茉莉」

グツと喜びをあらわにした所で露骨に現れた茉莉。コイツ絶対狙ってただろ…。

「まさか、遊ぶとか言おうとしてたの？」
「い、いえ！滅相もございません！あ、そ…うだ特訓しようと言おうとしました！」

「何か無理矢理よね…まあいいわ。この後特訓よ！」

「ええ…でも俺だってこの前戦って今日退院したばかり何ですよ？ちよつとくらい労わってくれたっつ…」

「ん？何か言ったかしら？よく聞こえなかったから、もう一回言ってくれる？」

「喜んで付き合わせていただきます！」

この前の戦い以降、何かと発言権が逆転した気がするんだけどコレは気の所為じゃないよね？

嬉々とした表情をしつつ腕を持っていかれそうな勢いで引っ張ら

れた後到着したのは、いつもの特訓場所だった。

「んで、今日の訓練は何するんですかね…。出来れば御手柔らかにお願いしたいのですが」

「今日は、多対一を想定した訓練をするわよ。今回の戦いで私も貴方も新型の動きに翻弄されてボコボコにやられた経験を生かして次につなげる為にも今回はコレを使うわ」

(これは…)

俺の目の前に設置されていたのは、固定砲台型の銃装備兵だった。それも、20以上はいる。

「大丈夫、玉はゴム弾だから当たっても青痣が出来る程度で済むわよ♡」

「それは流石の俺でも…」

「ゴタゴタ言っていないでサツサと強くなりなさい！」

Pii!という音とともに、稼働音が響き出す。どうやら先程の音はあの固定砲台のスイッチを押した音だったらしい。

「おい…おいおい!おい!ヤバいつてそれは!」

必死に目でゴム弾の動きを追うが軌道が早すぎて見えない。俺は目で追うのは辞めて感覚で避けることにした。

「予想して避ければ!っ!何とかなるっ!」

「それはどうかしらねえ!」

鬼畜茉莉さんが発動。さらに追加でスイッチを押され益々激しくなる弾幕。

「…はあ!オラオラオラアアア!」

「もつと頑張らないと死ぬわよ」

その後、結局2時間が経った頃によく終わったが俺も無傷では終わらず至る所に青痣が出来ていた。幸い顔に痣が出来なかったのが救いだと思った。

(折角、治ったのに茉莉のやつ最近DS具合隠さなくなったよな。それも素を晒してくれているってことなのかどうかは分からんが…)

いてて…)

痣のある腕を擦りながら家に到着する。

「母ちゃん、ただいまー。」

「おかえりなさい！アナタ♡」

「母ちゃん…何でコイツ家に居るの…。」

ドアを開けて自宅に帰ると鬼畜茉莉さんがいた。

「だつてー茉莉ちゃんお隣だし可愛いし、寧ろ家に挙げない理由を見つける方が難しいわよ？」

「…。着替えてくるわ」

俺の味方は誰もいないのだと自覚しながら諦めの表情を浮かべ、そくさと自分の部屋へと戻る。

「今は、そんな事よりもマジで今日筋トレやったら確実に逝くぞ」
(やらないまでも回避する方法は…)

着替えが終わった為、再びリビングへと向かうと料理が机の上に並んでいた。

「お、来たきたー。これ食べたら筋トレだからね」

「あのー茉莉さん俺お願いがあるんですけど…」

「ん？筋トレの事なら譲らないぞ♡」

「そこを何とか！お願いします何でもしますから！」

それを言った途端茉莉の表情が固まった。

「あれ？おーい茉莉さんー？生きてます？」

手をヒラヒラさせて様子を伺っているとピクリと反応した。

「何でもとは？」

「や、やだなあー。何でもは何でもですよ？あつ、でも俺にできる範囲だけだな」

「ふふっ…。じゃあその権利を私が使う時になったら言うわね…それまでは、取っておくことにするわ」

「という事は…今日の筋トレは無いですね？うっしやああ!!」

喜びも束の間、今日の晩御飯には俺の嫌いなトマトが入っていた。

「うおおお!!何でコレ今日入ってんの!？」

「あんたね、そろそろ食べれるようになりなさい？これくらい食えな

いで勇者やっけるとかよく言えるわね」

「そうは言ってもさくどうにも味が…むぐつ!？」

口の中にパックごと投げ入れられて泣きそうになる。

「茉莉ちゃんったら大胆ねえ」

「うふふっそうでしょ」

「むがむがむがっ！（鬼畜すぎる!）」

こうして夜が更けていった。